

●旧観音町のまちなみ

浅野川右岸の東山河岸緑地から「こまちなみ保存区域」の旧観音町へと足をむけます。城下町金沢では珍しいまっすぐな道で、町名は観音院が卯辰山から当地に移されたことに由来しています。遠くにみえる山麓の色濃い緑が、歴史的な家並みにアクセントをあたえています。

七稲地蔵で有名な寿経寺から、時間があれば観音坂を上り、今通ってきた旧観音町境界の俯瞰景観を楽しんでみましょう。

●梅ノ橋から鏡花のみちへ

旧御歩町境界を進み、梅ノ橋へ。橋のたもとは徳田秋聲記念館があります。上流を望めばアーチ型に組まれた天神橋や、四季折々の彩りに装った卯辰山が川面に映り、夢香る、まさに金沢らしい風光といえます。川沿いの鏡花のみちには、泉鏡花の代表作「義血侠血」のヒロイン・滝の白糸像と碑が建っています。

●並木町のマツ並木から天神橋へ

鏡花のみちを天神橋にむかって進むとクロマツの並木が残されています。県指定天然記念物「並木町のマツ並木」で、並木町という旧町名を復活させた要因のひとつでしょう。天神橋付近の水辺では、フナやウグイが泳ぎ、カルガモなどの水鳥たちが川の流りに身をまかせています。卯辰山を背にして水と緑の協調したこの空間は、かけがえのない貴重な自然環境です。

●帰厚坂

いよいよ卯辰山に登ります。帰厚坂。十四代藩主・前田慶寧が卯辰山を開拓したときに「藩主の厚き徳に帰する」との意味からそう名がつけました。その坂の中程にある右の階段から通りに出ると正面に石碑がみえてきます。泉鏡花の句碑で「はゝこひし夕山櫻峯の松 鏡花」と刻まれています。

●花菖蒲園

花菖蒲園は卯辰山の中腹に位置し、20万本ものハナショウブやアヤメ、カキツバタ、キショウブなどが植えられ、6月頃には色とりどりの花が咲き乱れます。アジサイも多数植えられ、ムラサキシキブなどの木々も緑を提供し、アゲハチョウやミツバチなどの虫たちが蜜を求めて飛来します。

●卯辰三社の樹林

花菖蒲園内右から豊国神社をはじめとする卯辰三社の参道が続きます。イロハモミジ、ミズキなど種々の樹木が鬱蒼と生い茂り、深緑で遮光された石段を



登る足音だけが、静寂な空間に響きわたります。途中の日暮ヶ丘からは、小立野台地から浅野川界限、遠くは兼六園・金沢城公園周辺など、広く市街地を見渡せます。ほか、日暮ヶ丘には梅林やサザンカ、三社境内では名札がつけられた種々の樹木もみられます。

●宝泉寺からの眺め

山野草園内を巡り、通りから左に折れ細い路地に入り東山蓮如堂、宝泉寺へと進みます。泉鏡花の小説にも登場する五本松で有名な宝泉寺。高台からの眺めは、まさに金沢を代表する景観のひとつといえます。浅野川の悠然とした水の流れと異彩を放つ橋の数々、陽光にきらめく黒屋根瓦の家並みと迷い道のような細街路。空の青が溶け込んだ緑の台地、雲と同化し霞立つ山々の雄姿が市街地の全景にさらに彩りをあたえます。境内には、サツキの陰に身を隠すように、ひっそりと芭蕉の句碑が建っています。

●子来町緑地から宇多須神社へ

宝泉寺前に緑地が広がります。子来坂に隣接する子来町緑地です。早春はウメに始まり、サクラ、アジサイ、秋の紅葉と、四季折々の変化を楽しむことのできる緑地です。緑地奥の竹で覆われた階段を下り、矢の根川沿いに歩を進めると、そこは宇多須神社。「心の道」のみちすじでもある神社境内には、五代藩主・綱紀が^{ほうそう}痲瘡を患った際、井戸水に酒を混ぜて体にかけて治したという言葉い伝えがある「酒湯の井戸」が残されています。

●ひがし茶屋街

最後は、重要伝統的建造物群保存地区のひがしの茶屋街をそぞろ歩きしてみましょう。藩政時代の情緒を色濃く残すこの界限は、五木寛之の小説「朱鷺の墓」の舞台としても知られています。^{べんがら}紅殻の木格子がある古いまちなみの暖色と、山麓の自然そのままの緑が融合し、一枚の絵画をみているような印象をあたえます。